Japanese Physical Therapy Association

311. 地域における療育と理学療法士

【キーワード】
地域療育・潜在的ニーズ・理学療法士

日浦病院
高沢浩太郎・村嶋幸四郎・冨永　雅之
堀田　玲美
長崎大学医療技術短期大学
中野　裕之・井口　　茂・鶴崎　俊哉
沖田　　実・穐山富太郎（MD）

【はじめに】

長崎県における訓練を含めた療育は、主に小児専門病院や大学病院等の専門機関を中心に実施されていることが多い。しかし、郊外に位置する大瀬戸町、当院の所在する外海町からは、これらの専門機関や通園施設に通院・通園するのは物理的に困難であり、障害児療育については医療過疎地といえる。これらの地域療育の現状を把握するために、平成5年に大瀬戸保健所が管轄内に居住する障害児の保護者27名に療育についてのアンケートをおこなった。その結果から①ほぼ全員が長崎市や佐世保市といった遠方まで受診や訓練のために通院している、②27名中20名が地域での訓練を希望している、ということがわかった。それに対して当院理学療法士が積極的に地域療育に関わったので、以下、その実践活動を考察を加えて報告する。

【アンケートの結果とその背景】

①地域の保護者や障害児の潜在的ニーズがあった。
②小児専門病院・大学病院からの障害児の受け入れ体制を整備する必要があった。
③保健・福祉や教育機関に対して、地域における療育を強調する必要性があった。

【活動の展開と結果】

①地域の保護者や障害児の潜在的ニーズの把握をおこなうために、専門病院が実施する巡回療育相談への理学療法士の派遣をおこなった。このことにより、地域の障害児を把握することができ、加えて、専門病院の医師や理学療法士との関係を持つことができた。
②療育相談の場で専門機関や各町役場に所属する保健婦に対して、地域における療育の必要性を強調し、これらの機関より障害児の受け入れ体制の整備をおこなった。
③小学校・保育園との連携を重要視し、小学校との関わりとして、療育相談時に担任教諭を含めたカンファレンスを持つことのほかに、月1回の授業参観日に障害児の保護者とともに当院理学療法士が出席した。また、保育園において保母に対しても療育上の指導をおこなった。

【考察】

現在、わが国における療育のニーズは多様化してきている。そのなかでも、地域は人間の日常生活の場であり、その生活の場において療育をさせたい、あるいはしたいという保護者や障害児のニーズがあることは、十分予測できる。アンケート結果からその潜在的ニーズを読みとることができる。そのニーズに対して、地域の病院の理学療法士が積極的に関わることにより、理学療法士自身が、障害児と専門病院・大学病院・保健・福祉や教育機関を結ぶパイプラインとなることは可能である、と思われる。

障害児の受け入れは、多くの場合が専門病院と大学病院からの紹介である。このことは、地域医療を実践する立場にある地域の病院に対する専門・大学病院との連携の必要性を示している。これに基づき、地域において療育を推し進めることは、保護者や障害児と医療機関との地理的な距離のみならず、心理的な距離をも縮めることができるであろう。

障害児の加齢が進むにつれて、保育園入園の問題やそれに続く就学の問題が生じる。これらの問題は、生活の場である地域を離れて考えることはできない。当院が実施している小学校教諭や保母とのカンファレンスや、授業参観への参加の機会を持つことは、障害児の生活状況を客観的に評価し、日常生活に密着した訓練をおこなうことを可能とするであろう。

このように、生活圏内において障害児の療育を推し進めることは、医療サービスの地域主導化の概念やノーマリゼーションの立場からも、意義のあることと思われる。

NII-Electronic Library Service